

小川浩司 著

## 『近代医学を切り拓いた人々』上巻・下巻

小川浩司著の『近代医学を切り拓いた人々』上巻・下巻の書籍紹介をいたします。

本著は耳鼻咽喉科・頭頸部外科専門誌『JOHNS』(Journal of Otolaryngology, Head and Neck Surgery)に“古典あれこれ”として2004年から2007年の間に掲載された小川浩司さんの近代医学に関わる歴史をまとめたものです。北里研究所病院耳鼻咽喉科部長を経て耳鼻咽喉科医院を開業された小川浩司さんが、臨床医学者の立場から近代・現代の医学を開拓してきた人々に焦点を絞って描いており、現在の医学史の中ではまだ史的研究の乏しい領域であるが、ノーベル賞の受賞者の業績とそれに前後する科学者の仕事にも目を配って書かれた内容の豊かな本である。

本書は上巻が13、下巻が16のテーマで構成されている。上巻は主にコッホにはじまる細菌学の系譜をフレミングのペニシリン発見とその後の臨床応用まで書き進め、次に自律神経系の生理学研究者と生化学研究者のビタミンの発見・アレルギー概念の確立、プロスタグランジンの発見に関わった群像を描き、「医学上の発見の偶然性とserendipity」で終わっている。下巻は「花粉症とアレルギー」が5編「ワクチン物語」が6編「ビタミン発見伝」が5編よりなる。生命現象の神秘である自律神経・免疫・内分泌に関わる生化学と生理学の基礎研究が、臨床医学にどのように寄与しているかをよく教示してくれる構成となっている。淡々とした語り口の中に研究者の悲哀も描かれており、研究者たちのネットワークがおおきな成果を上げてきたこと、ノーベル賞受賞者たちの横顔もよくわかる話がたくさん記載されている。

紹介者は興味の赴くままに、著者の意に反して下巻の「ワクチン物語1-ワクチン事始め」から読み始めて、ジェンナーやパスツールの事績の再認識をした。多くの医学史の成書が発見と発明に依る成功の歴史を記していることに比べ、本書は

医学の荒野を切り拓いた開拓者を描くと著者が述べているとおり、失敗や偶然性に依る成果の記載にも多くを割いている。それとともに同時代人脈について縦横無尽な記載がされておりその交流がよくわかるものとなっている。それとともに民族や国家にふりかかった戦争に依る研究者の運命や、研究成果が人類にもたらしたことまで記述されている読み物となっている。各編にはその記載の元となった学術論文等の詳細な文献が多数掲載されており、現代の臨床家にも医学史を研究する者にとっても大変有用な情報を与えてくれるものとなる。

本書に描かれた科学者・医学者群像を離れて全体から感じたことを3点ほど紹介しておきたい。

ひとつは、西洋医学の歴史がアメリカ合衆国の主導する現代医学に収斂しているように思われるが、若い国家であるアメリカ合衆国の医学の歴史は決して古い歴史をもったものではないことがよくわかる。近代医学の原点の多くが20世紀の戦場となったヨーロッパから内国的には平和であった米国へ運ばれそこで芽吹いて多くの結実をもたらしたことがわかる。近代のはじめにおけるアメリカ合衆国の医学は必ずしも世界を主導するものではなかったし、医学教育のシステムさえ不十分であったという。その後の平和な国内で医学をも含んだ科学技術の教育と研究に国力の相当のものを注げたこと、そのような国に国家や民族・人種などの問題を抱えた多くの叡智を持った人が集まってきたこと、それを受け入れられた結果が現在の姿であることを理解させてくれるエピソードがたくさんつづられている。

もう一点は古い近代以前の知識や経験的なものが近代・現代の科学により再評価され普遍性をもったものとなってゆくプロセスがよくわかるように書かれていることである。医学用語の中に残る個人名のついた術語の由来を読むと、著者が医

学を荒野と表現しそれを切り拓いたと書く理由がよくわかる。

上巻の最後に著者は「医学上の発見の偶然性と serendipity」の1編を載せて、多くの医学・科学の発見がセレンディピティの賜物であることを書いている。しかし本書を読むことによりセレンディピティに遭遇できる僥倖には、必然的な知識と教養または感性が必要なことを紹介者は感じる。今年、2007年 Morton A. Meyers により書かれた『HAPPY ACCIDENTS: Serendipity in Modern Medical Breakthroughs』が小林力訳『セレンディ

ピティと近代医学—独創、偶然、発見の100年』として中央公論新社から発刊された。Meyers は内科・放射線科医ということであり、とり上げられているエピソードも異なるものが多いが、合わせて読み比べることも現代の科学史・医学史に興味を持つものにとっては楽しみとなるであろう。

(渡部 幹夫)

[東京医学社、〒102-0085 東京都千代田区六番町7-36、TEL. 03(3231)8741、2010年、上巻204頁/下巻224頁、非売品]

梶谷光弘 著

## 『松江藩校の変遷と役割』

近世の藩校教育に熱い視線が向けられている。日本の国際的地位が低下し、内政面でも閉塞感が強まるばかりの昨今、改革を断行し、人材の育成に成功した諸藩の成果が、温故知新の発想のもとに再び脚光を浴びつつある。

中国筋では萩の明倫館を筆頭に、福山の誠之館、津和野の養老館、備中松山の有終館などが特色ある藩校として浮かぶが、徳川家の連枝にあたる松江藩(18万6千石)も早くから教育の充実に努めた山陰の雄藩であった。雲州松平家は家康の孫を藩祖とし、津山、福井、前橋、明石の諸藩と同族で、寛永15年の入部以来、一度も移封なく、10代234年に及ぶ治世を誇った。

松江藩校の文明館(明教館、修道館)は6代宗衍の宝暦7年に、医校の存濟館は7代治郷(不昧公)の文化3年に創建された。また講武所の大亨館も同じころ設けられ、文武医兵にわたる教育の基盤が整うのは、名君・不昧公の時代であった。本書はこれら松江藩学の史的変遷と、学問・教育に関わった人々の事蹟を周到にまとめ、広く読まれることを目的として平易に著わされた良書である。

ところで島根県が儒・医学史、藩学史研究の先進県であり、各分野の著述が完備する地域である

ことを知るものはそう多くあるまい。儒学では谷口為次『島根儒林伝』(昭和15年)、佐野正巳『松江藩学芸史の研究/漢学篇』(昭和56年)がある。医史は米田正治が『島根県医家列伝/正・続』(昭和47・53年)、『島根県医学史覚書』(昭和51年)をものし、医学分野における島根県の後進性を見事に否定してみせた。また著作ではないが、東大史料編纂所長をつとめた桃裕行は戦前の本誌に「松江藩の洋学と洋医学」を寄稿している。桃氏は藩校創始に際し、中心的役割を果たした藩儒・桃白鹿の後裔である。藩学史によく目配りがなされたものでは内藤正中『島根県の教育史』(昭和60年)がある。これらによって県内旧藩の特色ある教育・文化が多角的に論じられ、明らかにされていることはまことに羨ましい限りである。

本書も上記各書の内容をふまえるが、近年、松江藩医史に関わる論考を続々と発表している著者の手になるだけあって、医学教育と西洋学導入に関する各節は、自らの地方医史研究の成果を十二分に活用し、従来にない充実した内容となっている。話題では浪費家9代斉貴の生涯と彼の蘭学愛好の実態、ならびに西洋学移入に際しての姻族佐賀藩の影響を指摘する点が興味深い。もともと松江藩の医学教育は先進的位置にあったが、その影